

ワールドトークRPG!
3

石井先輩

テーブルトークRPGのマスター。
事故で死んで「アーク・タレウ」の
神になった。

アーティア

ウォルスタの商業神神殿長。
守銭奴。メテオの仲間。

ハム

ウォルスタ自警団長。
武器マニアな戦士。
メテオの仲間。

ユルセールV世

ユルセール国王。
メテオたちの抹殺を企む。

ラス・バルムンク

通称「ストームブリンガー」。
オーバーレベルの剣士。

**メテオ・
ブランディッシュ**

本編の主人公。伝説のパーティ
「流れ星」のリーダーで、
ウォルスタの魔術師ギルドの長。

エステル

メテオの弟子で魔術師。
賢者レベルが高い。

リーズン

ウォルスタの領主。
エルフで精霊使い。
メテオの仲間。

ガルーダ

リトルフィートの盗賊。
メテオの仲間
トラブルメーカー。

メル

メテオの護衛を
している戦士。
無邪気な性格。

**主な
登場人物**
Main
Characters

アータレウRPG

キャラクター名

メテオ・ブランディッシュ

種族名

ヒューマン

性別

男

年齢

26 (16)

職業属性

魔法使い

LV

スキル名

17	魔術師
3	賢者
10	精霊使い
10	神官
10	盗賊
1	ゲームマスター

経験点

717,560

所持金



キャラクターの肖像・特徴

重要なアイテム等

- ・無限の革袋
- ・魔術師の杖
(魔法の発動体)
- ・リング
(魔法の発動体)
- ...etc

STR
36

DEX
36

AGI
34

INT
118

VIT
114

MND
518

1 役割

メテオが亡霊都市アヴィールドで『不死の王』と激突する少し前のこと――

《転移》^{テレポルト}の魔法を使い、メテオをアヴィールドにほど近いカザンの町へと飛ばしたエステル。初めて使う《転移》^{テレポルト}であったが、魔術師として今まで培^{もか}ってきた経験が成功を確信していた。

「お師匠様……ご武運を」

冷静に考えれば、『不死の王』と一騎打ちなんて正気とは思えない。

『不死の王』というアンデッドは、古代から生き続ける一部のドラゴンや、魔界のデーモンロードとも肩を並べる災害みたいな魔物。本来なら、英雄と呼ばれる人間や最高位の冒険者たちが集まって打倒すべき相手。

しかも、今相対^{あいた}しようとしている『不死の王』は「プリンガー」の称号を持つ者だ。

だが、それでもエステルには、メテオが負けるなど想像もつかなかった。

ほんの数日、冒険と呼べる戦いをもにただけでも、メテオの魔力が底知れないことがよくわかったからだ。正直、エステルの想像をはるかに超えていた。人間が到達できるところよりも、さらに先に行ってしまったようにさえ思える。

本当であれば弟子として、いや、力なき者が力ある者を前にするように、もつともつと畏^{かしこ}まり、

畏怖すべきであつたかもしれない。

だが、メテオの奔放さが、エステルに畏まりすぎることを許さなかった。悪くいえば、最高位の魔術師としては落ち着きがなく、子供っぽくて感情的なだけかもしれない。

（今のお師匠様には、昔感じたような陰りがなくなつた。ウォルスタを作つてから、冒険と修業の果てに身につけた魔法の力と立場が、いつもお師匠様を苛んでいた。一步一步身につけてきたものが、重くてたまらない。そんな……）

先ほどまでメテオが立っていた場所を眺める。心の問いかけは止まらなかつた。

（今のお師匠様は、無欲で平和な方が強大な力を手に入れたかのような感じ。力に執着せず、日々平凡に楽しく過ごせばいい。——そんな、庶民でしか持ち得ない、持たざる者にしか得られないような、純粹さが……）

「エステル？ あなた、どうしたの。ぼんやりしているけど」

ベッドにいる、メテオの仲間で神官のアーティアに声をかけられると、エステルはハツとして背筋を伸ばした。

「い、いえ、なんでもありません。お師匠様が無事帰つてこられるようにと思つていただけで」

「……メテオなら大丈夫よ。なんだかよくわからないけど、魔術の他にも神の加護やらなにやら受けているみたいだし」

「……はい」

まだ、肉体と魂が分離しているような感覚があるのか、うまく身体を動かせないアーティア。

痛みに眉をひそめつつ、ベッドのふちに腰をかける。それだけの動きでもえらく難儀なのが見てとれた。

「アーティア様、ご無理をなさらないで」

「エステル。あなた、メテオと初めて会つたのは三年くらい前よね。もう、わたしたちが『流れ屋』として名前が売れていた頃」

「えっ。は、はい。その頃だと思います」

突然アーティアが今までと違う話題を振つてきたため、エステルは少し困惑した。

「あなたにとって、今のメテオはなんだかバカっぽく見えるかもだけど、あなたと出会うちよつと前までは、あんな感じだったのよ、あいつ」

「ええっ。昔のお師匠様つてあんな感じだったんですか!? でもどうして……」

「あいつ、外見こそ子供になつちゃったけど、実年齢はわたしとそう変わらないのは知ってるわよね。……そうなった経緯は省くけど、外見が子供になつたことで、周囲に舐められないよううざいぶん気を遣うようになったのよ。それまで誰に対してもタメ口だったのに敬語とかも話したりするし、落ち着いた感じの表情でいることが増えたり、けっこう苦労していたのよ」

「は、初耳です」

「そりゃあ、いちばん威厳を保たなきゃいけない弟子の前じゃあね」

優しく微笑むアーティア。こっそりと「わたしがこんなこといったのは秘密よ」と、唇に指を立ててみせた。エステルにしてみれば、神殿の長であるアーティアがこんなお茶目な仕草をすること

にも驚いた。

「なにがあつたか知らないけど、今のメテオの振る舞いつていうのは、若いころのメテオそっくりなのよ。偉い人の前で礼儀を尽くすことも知らず、ただ冒険のためだけに魔法を使い続けて、わたしちといつしよに馬鹿で無謀なことばかり続けてきたメテオ」

懐かしそうに目を伏せたアーティアは、昔を思い出しているようだった。

「人は誰しも演技をしているの。魔法使いの演技。戦士の演技。盗賊の演技。素の自分にいろんな立場や役割が乗って、それが自分になる。わたしだつて『商業神殿の長、アーティア・ソルディア』という役割を持った人間。けど、本当の自分は『ただのアーティア』」

「……………」

「でも、なかなか素直にはなれないものよ。メテオもそうだった。ウォルスタができてからは、わたしたちの中では彼が一番ガチガチに役割を演じていたのかもしれない」

「……役割を演じていた。それは、魔術師ギルドの長として、師匠として、ということでしょうか？」

「あいつの心のうちまではわからないけどね。ただ、わたしがわかるのは、今のメテオは『冒険者を始めたころの』メテオであるつてことくらい。エステル。あなたにはショックかもしれないけど、アレが本来のメテオ。『流れ星』のリーダーであり、魔術師にして冒険者、そしてウォルスタ魔術師ギルドの長、メテオ・ブランディッシュの素顔よ」

これまでエステルは、今のメテオに対して嫌悪はしていないものの、戸惑いはあった。

以前のメテオよりも気安くて心の壁がない。

それはわかつていたが、前世の記憶や記憶の混乱でこうなったというのは、どこか腑に落ちないところがあつたのだ。《嘘感知》^{センスライ}も使い、その言葉に嘘がないこともわかつていたし、なによりエステルの勘が偽者という可能性をはなから除外していた。にもかかわらず、である。

それが今、ストンとあるべきところに落ち着いた。

（あれが、本来のお師匠様）

師としてのメテオではなく冒険者としてのメテオ。

それはまるで、父や母が親であると同時に、ひとりの男女であるように、師もまた別の顔があるということだ。

戸惑いは消え、別の感情が生まれているのに気づいた。

「えへへ。ちよつと嬉しいです。お師匠様が無理してわたしに合わせてくれているんじゃないかと、あれが本当に本当のお師匠様なんですね」

「メテオは、あなたが思っている以上にバカよ。せいぜい嫌いにならないであげて」

「大丈夫です、わたしお師匠様大好きです!! 言葉遣いがそれっぽくないところも、すごい魔術師なのになにもそんなふうに見えないところも!! ちよつとエッチなところもありますけど……大好きです!!」

「……そのエッチなところを、もつと詳しく教えてちょうだい」

キラリ。アーティアの目が鋭く好奇心に光ったところで、エステルがハツとなにかに気づいて耳

を押さえた。

「ロルト様？ はい、今は神殿でみんないます……すぐにですか。わかりました、みんなに伝えて移動します!!」

魔術師ギルド三導師のひとり、ロルトじいからの《精神感應》が届いたのだ。

彼は今、『流れ星』の一員でウォルスタの領主リーズンとともに、領事館にいる。

「何か動きがあったの？」

「ロルト様から連絡です。リーズン様たちとともに北門に移動するので、高位魔法が使えて戦える者は、急いで合流するように……とのことです」

「噂のストームプリンガーが近づいているのかしら。メテオがいなくなつてすぐに事が起こるあたり、完全にこの町は狙われているわね」

「わたし、ギルドのみんなや、ガルーダさんたちを連れて合流してきます!!」

「待って、わたしも連れていつて」

と、ベッドを立とうとしたアーティアだが、全身が痛むのか苦悶に顔を歪める。

通常ではあり得ない、魂の破滅からの再生を果たした上に、魂と肉体を繋げる過程にいるアーティアの身体は、通常の行動ですらまともにできないでいる。おそらくは神聖魔法を使うことも叶わないだろう。

《願う》の奇跡ですら、死から再生した代価を完全に解消することはできなかったようだ。

「アーティア様はまだ戦える状態じゃありません。わたしたちに任せてください」

「——でも……痛ッ!!」

「わたしひとりじゃありません。メルもガルーダさんも、リーズン様たちもいます」

「……………」

『流れ星』の皆様たちが育てたウォルスタです。お師匠様とアーティア様、お会いしたことはないですが、マリアーージュ様たちに代わつて、この町に育ててもらった恩を少しでもお返すするため、わたしたちに頑張らせてください」

じつと見つめるエステルの瞳を覗きこみ、アーティアは静かに頷いてみせた。

「……『流れ星』に代わつてとは、大きく出たわね」

「す、すみません。決してその、皆様の代わりになれるとは思ってませんが、少しでも頑張らせてもらおうと……」

「その引き出しを開けてご覧なさい」

有無をいわさぬ調子のアーティアは、視線を戸棚に向けて小声で何かを呟いた。すると、引き出しのひとつからカチャリと鍵が外れる音がした。

魔術師が使う《魔法錠》だ。決められたキーワードを唱えないと鍵を開けることができない。魔術師ではないアーティアのことだから、どこかでメテオに頼んで魔法をかけてもらったのだろう。

「アーティア様。これって……魔石!？」

「ええ、何かあったときのための秘蔵の石。引き出しごと、みんな持つていつていいから、絶対に死ぬんじゃないわよ」

棚の中には大ぶりの魔石が数十個。使い捨ての魔力蓄積装置である魔石は、小さなものひとつだけでも一般市民の年収レベルの高額で取引される。これだけの大きさと数であれば、豪邸の一軒二軒は軽く建てる事ができるだろう。

「アーティアさ……」

「急ぎなさい!! お金はこういうときのために使うもの。遠慮せずに、使い切るつもりでリーズンたちに合流なさい!! そして、あなたはあなたの役割を果たしなさい」

アーティアの気迫と言葉に、エステルは自らの言葉を呑みこんだ。

そして、一度だけお辞儀をすると、引き出しごと抱えて部屋から出ていった。

「……メテオの弟子かあ。わたしも弟子のひとりでも育てておくんだったわ」

エステルに連れられたメルやガルーダの騒がしい声が遠ざかるのを聞きながら、アーティアは嬉しいような寂しいような表情で息をついた。

「神よ、あの者たちに幸運の導きを……」

「ぶみゃー……お」

アーティアの祈りの言葉は、聞き慣れた猫の鳴き声中で中断された。

猫屋敷の看板猫コーデリアが、開け放しにされていた部屋の扉をするりと抜けて、いつものふてぶてしい鳴き声を上げたのだった。

長いことこの猫を見てきたアーティアであったが、扉から入ってきたのは初めてだったのでびつ

くりした。

いつもは施錠をしているということもあるが、コーデリアがアーティアのところに来るときは窓から、しかもそれは何か用事があるって彼女を呼びつけるときだけだったからだ。

「……コーデリア。悪いけど今日は動けないわ。メテオのお陰でウォルスタの人間も猫も、みんな元気になったはずよ。こんなときになにをにきたの?」

「ごみゃー……ん」

コーデリアは姿に似合わぬ跳躍でアーティアのベッドに飛び乗ると、普段と変わらぬふてぶてしい顔のままそこで丸まった。肥満体で白い毛並みのコーデリアがこうすると、巨大な饅頭にしか見えない。

「……もしかしてわたしを心配してくれているの?」

アーティアの問いかけにゴロゴロと喉を鳴らす。これも、コーデリアという猫には滅多にないサーブスであった。

猫の体温、こと超弩級サイズのコーデリアが発する熱を感じて、アーティアは身体から緊張が抜けていくのを感じた。

(エステルだけじゃなくて、コーデリアにまで心配されたというわけね)

情けないとは思わなかった。

自分には肩を並べた仲間がいて、その仲間が育んだ子らがいて、おまけに猫まで自分を思っている。

(こんなに嬉しいことはないわ)

これまでの出会いと幸運。そしてこれから起こることについて。

アーティアは万感の思いを込め、先ほど中断された祈りを再開するのだった。

2 ウォルスタ攻防戦

「来たか」

ウォルスタの北門にエステルたちが集まったとき、リーズンが呟いた。

領事館で待機をしていた彼のほか、ハム、ロルトじい、リコッタはすでに門へ来ており、ウォルスタのはるか北の森まで続く平地を深刻な顔で睨んでいた。

「ニャンですか!! あのごるごるしたのは!?」

メルが素っ頓狂な声を上げて、遠くを指差した。

この場に集まった全員が、まさかと思いつつもその正体に気がついていた。

巨大な竜巻が六本。このウォルスタに向かって等間隔に広がり、まっすぐ進んでいるのだ。

「じいも長く生きとりますが……あんな巨大な竜巻が六本もまっすぐ進んでくるなど、初めて見るのう」

ロルトじいも険しい顔で竜巻を睨んでいる。

天空に漏斗状の雲があり、そこから続く象の鼻のように長くうねうねと曲がったチューブ状のものが、接触するすべてを蹂躪する。

竜巻は、進行方向にある街道の石畳や樹木を、子供がオモチャを放り投げるかのように上空へと打ち上げる。もちろん上空数百メートルから地上に落ちるのだから、生き物に限らず建造物などもひとたまりもない。

「あの竜巻、まだ遠いけどずいぶん早くこっちに来るよう。十分もしないでウォルスタに直撃? みたいな感じだよ」

「ふん、ガルダ。その時間は確かか」

「おいら、こういう自然現象のことは得意なんだよう。リーズンだって知ってるでしょ」

「まあな。で、あの竜巻はどうしたらいいと思う」

「おいらなら逃げるね」

「……ロルト翁。意見を伺いたい。あの竜巻を魔法でなんとかすることは可能か?」

早々にガルダの意見に見切りをつけ、リーズンは魔術師ギルドの碩学であるロルトに意見を求めた。

「残念じゃが、魔法で直接あの竜巻を解除するようなことはできぬ」

「では、間接的にはどうにかなるのですか?」

「強力な広範囲の攻撃呪文を連続して竜巻に叩きこめば、その勢いを相殺できるかもしれぬ」

リーズンはわずかに目を伏せ思考を巡らせたのち、宣言した。

「ウォルスタ領主として、この場はわたしが仕切らせてもらう!!」

今この場にいる全員をざっと見回す。

「アーティアとメテオがいないが、何か非常事態か？ 先の奇跡みたいな光の魔法と何か関係があるのか」

「リーズン様。話が長くなりますので結論から申し上げます。アーティア様の生命に別状はありません。しかし、今は動くことも魔法を使うことも叶いません。お師匠様は単身アヴィールドへ、ペストブリンガーを倒しに向かっております。そしてあの光の奇跡は、お師匠様の奥の手のことです」

エステルがそう答えた。

「うむ、簡潔だ。ふたりとも無事であるなら安心だ」

(この非常事態に、よく冷静に物事を把握はあくしている)

と、リーズンはエステルの発言に対し、内心で感嘆した。

(この場を無事に切り抜ければ、リコッタともいい仲間になれることだろう)

自らの愛弟子のことを思ったが、すぐに頭を切り替えて言葉が続けた。

「ならば、今ここに集もよった者たちが、ウォルスタでの最強戦力といえるだろう。この人員で今からあの竜巻に対応し、その背後にいるであろう「ストームブリンガー」の攻略も行わなくてはならない」

初めに見たときよりも明らかに近づいてきた竜巻を示して、リーズンは対応策を伝える。

「現状、竜巻を無効化する方法は、強力な広範囲攻撃呪文を叩たたきこむことしかない。そこで今いるメンバーを三隊に分けて、それぞれが受け持った竜巻をなんとしても消し去る。あの六本の竜巻がひとつでもウォルスタに届けば俺たちの負けだと知れ」

リーズンの言葉に、この場にいた全員が了承の声やリアクションを取る。

一本でも竜巻が町を襲えば、ウォルスタは壊滅する。

みんなも、それをわかっているのだ。

「最右翼の竜巻の一本。これをロルト翁おうちを筆頭に、魔術師ギルドの三導師さんどうしで受け持っていたきたい」

「承知した」

ロルト、フィリア、オリナス、彼らは魔術師ギルドの三導師さんどうしと呼ばれるが、三人とも強力な範囲攻撃魔法を操ることができる。

「最左翼の一本。これをエステルとリコッタでなんとか対応しろ。メルは俺たちと一緒に来い」

「は、はい!!」

若手の三人のうち、攻撃魔法を使えるのは、エステルとリコッタのふたり。メルは前衛型なので、それを知ってか、オリナスがリーズンに提案をする。

「リーズン殿。若手ふたりでは荷が重すぎるのでは？」

「心配無用。オリナス殿、もはやこの三人は、俺たち『流れ星流れ星』がこの町を作ったときの實力に匹

敵^{てき}する。エステル、やれるな……?」

「……はい。やれます!!」

「それでこそ『流れ星^{シズメツキ}』の二代目だ。任せたぞ」

「ににに、二代目なんてそんな!!」

顔をぶんぶん振って恐縮するエステルだが、そんなことはお構いなしに話を続ける。

「ハム、ガルダ、メル、そして俺が、中央で四本の竜巻の相手をする」

リーズンの作戦に、ロルトじいが難色を示す。

「リーズン殿。ハム殿とガルダ殿とメルは、魔法を使えないのでは……?　ひとりで竜巻四本を相手取るおつもりか」

「ああ。ハムたちには、竜巻を消したあとに出てくるであろう『ストームプリンガー』の相手をしてもらうつもりだ。竜巻は俺ひとりでなんとかしよう」

「危険じゃ!!　わしら三導師^{さんどうし}が全力で魔法をぶつけて竜巻を消せるか消せないかという規模。一度メテオ殿に《精神感応^{テレパシ}》で連絡を取って、こちらに戻ってきていただくほうが確実じゃ」

「それは駄目だ」

「なぜじゃ?　ペストプリンガーがまき散らした病気は解消されておる。ここは全戦力で目の前のストームプリンガーを打倒すべきではないか」

「ペストプリンガーに逃げられて、もう一度同じことをされたとき、ふたたびウォルスタを守るかわからない。あの奇跡の光がそう何度も使えるとは思えない。ペストプリンガーとストームプリ

ンガーが連携を取っていた場合、作戦が失敗しても命が無事なら、一度引いて再度波状攻撃を加える。少なくとも、俺はそうする」

すらすらと言葉を並べるリーズン。

「メテオがペストプリンガーを倒し、俺たちがストームプリンガーを倒す。次はない。今、ここで決着をつけなければ、守るものが多い俺たちの負けだ。きっと、メテオもそれがわかっている。だから、単身でプリンガーに向かっていったのだろう。おそらく敵の狙いも、戦力の分断だ」

「……なるほど」

「それに、俺とて『流れ星^{シズメツキ}』の最大火力を担当していた精霊使^{あま}いだ。侮^{あなづ}つてもらつては困る」
平素、むすつとしているリーズンだが、このときばかりは本当に心外だったのだろう。声にも熱がこもっている。

「万能型のメテオに対して、俺は純粹に相手を打ち負かし、ダメージを負わせることが得意だ。あの意味こは俺の見せ場だろうな……イーフリートよ、姿を現せ」

右手を一振りして何者かに呼びかける。指に嵌^はめられていたミスリル銀製の指輪から豪炎^{ごうえん}がほとばしり、紅蓮^{ぐれん}の炎を身に纏^{まと}った巨人が姿を現した。

「久しいな、リーズンよ」

「イーフリートよ。しばらくぶりだが、ともに思い切り暴れようか」

「相手はどのどいつだ?」

「あの竜巻を消す。見たところ風の上位精霊ジンの力で生み出されたものではないようだ」

「うむ、普段よく見るあの忌々しいつむじ風とはまた別物のようだな。いいだろう、久しぶりの召喚だ。ひと暴れしてくれる」

突如現れた炎の上位精霊——イーフリートと親しげに言葉を交わすリーズン。その様子を見たリコッタが、ロルトやエステルたちにくっそり耳打ちする。

「リーズン様は、エルフには珍しく炎の精霊を好んで使われます。あれはリーズン様が契約を交わしている炎の上位精霊のイーフリート。その力は成竜に匹敵するでしょう」

「——そういうわけだ。俺のことは心配ない。みんな、急いで移動を開始してくれ」

「あ、リーズン様。アーティア様がこれをみんなに使ってくれと」

エステルが、引き出し一杯に入った魔石を出す。

「アーティアめ。こんなに魔石を溜めこんでいたか。俺とロルト殿とエステルの部隊で三分の一ずつ持っていこう。商業神殿の長からの贈り物だ。優先的に魔石から魔力を引き出し、自前の精神力は温存しておくように」

魔石はたくさんあった。魔法使いたち全員で分けても、ひとりが大きい魔法を十発分という感じであろうか。特に先のペストプリンガーの疫病騒ぎで大きく精神力を削られていた一行にはありがたい。

「時間がない。とにかく急いで行動に移ってくれ。——健闘を祈る」

短く言葉を発し、リーズンはイーフリートとともに竜巻へと向かっていった。

それに倣って、ロルトじいとエステルのパーティも、左右に分かれて受け持つべき竜巻へと向

かった。

3 ウォルスタ三導師

自警団のリーダーであるハムの指示で、ウォルスタ北門に馬が集められていた。

そのおかげで、リーズンたちは竜巻が町に接近してくる前に、こちらから接近することができた。地味ながらハムのフラインプレイとっていいだろう。

最右翼の竜巻を任された魔術師ギルド組。この町では『流れ星』の次に有名な『三導師』だ。その中でも、ギルド長のメテオ・ブランディッシュについて魔術を窮めているロルトじい。馬に跨った彼は、ハムの周到さに感心をしていた。

「メテオ殿の仲間とはいえ生粋の戦士。武張った男かと思いきや、なかなか渋い動きをしおる」

この世界では、すでに老境といって差し支えないロルトじいであるが、手綱捌きは矍鑠としたものだった。

「し、しかし、ロルト様がこうも馬を操れるとは意外でしたな」

隣を走る三導師のひとり、オリナス・メリングは、騎士のような顔立ちの魔術師にして、知識神を信仰する神官でもある。こちらは外見のわりに、いくぶんおっかなびつくりという感じで、乗馬をこなしている。

「なんじゃ、オリナス。お主はまだ若いくせに、乗馬のひとつも満足にできぬのか」

「わたしは若い頃から本の虫でしたから……なッ!! おお怖い。それに、わたしはもう四十三歳ですよ。この歳で馬を早駆けさせるとは思いませんでした……ッ」

ところどころ馬のリズムに言葉を途切れさせつつも、会話する余裕はある。この世界において、ある程度の立場のものであれば、乗馬は嗜みたしなのようなものだった。オリナスも決して得意ではないが、馬を走らせることくらいは問題ないようだ。

「四十三で若さを語るとは片腹痛いわ。あと二十も歳を重ねてから抜かしおれ……それに引き換え、フィリアの乗馬は堂に入ったものだわい」

「エルフで馬に乗れない者、弓を扱えない者、精霊と交信できない者はおりませんことよ」

言葉の真偽はともかくとして、三導師中さんどうしでもっとも華麗に馬を乗りこなしているのはフィリア・ティリスに間違いない。

ついでに年齢も最も……と、ロルトじいは心の中で呟つぶやいたのだが、声にするほど無粋ぶすいではなかった。エルフの寿命は、人間のそれと比べものにならない。外見だけでいえば、フィリアは未だ二十代後半の容姿を保っている。

「ロルト様、竜巻が近づいてきましたが、どのようにいたしましょう」

オリナスが問いかけた。

「力押しになるの。《火球》ファイヤボールを複数呼び出し、竜巻に対して垂直に三発。射程範囲に入ったらこれを限界まで行う。全員魔石を持っておるな？」

オリナスとフィリアは頷うなずいてみせる。導師クラスの魔術であっても、《火球》ファイヤボールを一度に三発となると負担は大きい。普通なら三回も使えば精神力が底をつくだろう。

魔術師が使う広範囲破壊呪文としては、《隕石落とし》メテオラを除き、基本にして究極である《火球》ファイヤボールだが、果たしてあの巨大な竜巻に対して何発当てればいいのか……

迫りくる竜巻は、ロルトじいをしてそう思わせる。攻撃魔法を叩きこむというのは、単純に風の勢いを止めるという意味で、他に有効そうな手段を思いつかなかったのだ。

こうなつてくると、魔法を使えない者や、最低でも《火球》ファイヤボールを使えない魔術師はなにもできない。自分たち三導師さんどうしがなんとかしなければという思いは、いやが応にも増してくる。

「ここで止まろう。馬を下りて呪文に集中するぞ」

ロルトじいが馬を下り、ふたりもそれに倣ならった。馬は不安げにしていたが、三導師さんどうしの後ろに隠れるように回りこんだ。もつとも《火球》ファイヤボールの魔法がひとたび発動すれば、並の馬は音に驚いて逃げしまふだろう。馬を下りたのはこの先役に立たない、ということでもある。

「魔法は儼むしに合わせろ。いいか、一度魔法を使えば撤退てつたいはない。竜巻に呑みこまれるか、竜巻を消し飛ばすかじゃ……オリナス、フィリア、覚悟はいいか？」

「いつなりと。知識神への祈りは済ませておりますゆえ」

「わたくしも問題ありません。みなで作った魔術師ギルドとこの町を守りましょう」

「うむ、それでは魔法の準備を!!」

ロルトじいは自分の背丈ほどの杖を。

オリナスは知識神の信徒を表す刻印を入れた杖を。

フィリアは銀の腕輪を通して腕の前に差し出した。

それぞれが得意な魔法の発動体を構えて、そのときを待つ。

「今じゃ!!」

「三出でませい。天を焦がす炎と石壁崩す衝撃よ。爆ぜて散れ。《火球》」

三人が繰り出した、合わせて九つの火球が竜巻へと撃ち出される。

およそこの世界では、この呪文以外では聞けないような爆発音と熱風に、今まで不安に耐えていた馬たちの我慢が尽き、ひととき高く嘶いて遁走する。

「まだじゃ!! 勢いすら弱まった感じがせぬ!!」

「《火球》!!!!」

「もつとじゃ!! 気絶するまで撃ちこむぞ!!」

続けざまに、火球は竜巻にぶつかっていく。

さしもの三導師も、ここまで魔法を連発したのは初めての経験だった。

それもそのはず。すでに自前の精神力では実現できないほどの魔法を使っている。魔力を吸い上げられて、次々と粉々になっていく魔石。三人は間断なく《火球》を使い、目の前に城壁のような炎の弾幕を作る。

もし、一歩下がってこの光景を冷静に眺めたら、《火球》の弾幕が当たるたびに、竜巻の進行速度と勢いが収まっていくのがわかったはずだ。

しかし、三導師には、そういったことに気がつく余裕などなかった。

「くつ。最後の魔石が砕け散ったわ」

「フィリアもか、わたしもだ」

「オリナス、フィリア、あとは自前の魔力がものをいう。ふんばるのだ!! ウォルスタの三導師の名前にかけて!!」

アーティアより預かった魔石を使い果たし、残るは真正正銘、すべて自前の精神力による魔法だ。これが尽きればどうすることもできない。

「《火球》!!!!」

「《火球》!!!!」

「《火球》!!!!」

三人が三発ずつを三回。計二十七発の火球を竜巻に撃ちこんだところで、フィリアの身体が支えを失ったように地面へ崩れ落ちた。

「ロルト様、フィリアが!」

「フィリアはメテオ殿の部屋で精霊を使っている。そのぶんの疲労が溜まっていたのだろう」
倒れる仲間を支えることもできず、ふたりは魔法を使い続ける。

「《火球》!!!!」

「やったか!」

幾度となく撃ちつけられる火球に、ようやく竜巻が目に見えて弱くなってきた。それが証拠に、

今まで魔法による爆炎と煙が竜巻によって即座に吹き飛ばされていたのに、今では視界を一部封じるくらいまで煙が立ちこめている。

「ロルト様、わたしはこれ以上《火球》を撃つ魔力が……」

「任せい。儂が最後を決めてくれよう」

魔術師レベルが他のふたりよりも高いロルトじいが、もはや大きなつむじ風といった竜巻に向け必殺の気を込めて魔法を放つ。

「――《火球》!!!!」

魔法は狙いを違わず竜巻へと直撃して炸裂する。

「……やったか」

だが、わずかに竜巻と思われる「根」が残っていた。

それは、ロルトじいたちが見ている前で、みるみる勢いを増していった。

このままでは、また巨大な竜巻として成長してしまう。

「ロルト様……あと一撃です」

「……今の魔法で儂も打ち止めじゃ。《火球》はおろか、《魔弾》の一発も放てば気絶してしまうだろうて」

ロルトじいの顔が無念に歪んだ。

「なればせめて奇跡を信じ、《魔弾》を放って散るも一興か……」

「ロルト様」

オリナスがロルトじいの肩を掴んだ。

「わたしの心の力。すべてお渡しいたします。どうか、どうかウォルスタを……《精神賦活》」

オリナスが崩れ落ちた。自らの精神力を他人に譲り渡す神聖魔法だ。

「オリナスめ。格好を付けおって……」

倒れたふたりを見て、ロルトじいはにやりと笑う。

ふたりとも意識を失っているだけで、外傷はない。一日安静に休んでいれば、精神力は回復するであろう。

「出でませい。天を焦がす炎と石壁崩す衝撃よ。爆ぜて散れ……」

この呪文だけは、失敗するわけにはいかない。

（しかし、ここまで本気の極限で魔法を使うことなど数十年ぶりじゃな……若い頃を思い出すわい）

生涯で数えるほどしかしてこなかった神への祈りを込め、呪文を完成させた。

「――《火球》!!!!」

4 新しい力たち

「こんな形で初のパーティプレイになっちゃったね」

エステルは、馬を巧みに操るハーフェルフの同年代に微笑みかける。

「わたしもびっくりです」

馬から伝わってくる心地よい振動を感じつつ、リコッタも気負いが無い。茶色いスカートに白いブラウスという、領事館で働いている姿のままであるが、動きにくさなどは微塵も感じさせない。エルフの血が、人馬一体を助けているのであろうか。

エステルは、リーズンからふたりで竜巻をなんとかしてこいといわれて、どうなることかと不安だった。

なにしろリコッタとは旧知の仲とはいえ、こんなに逼迫した場面で行動をとともにするのが初めてだったからだ。

つい先日のことである。

「あつ、あの、リコッタさん。よかつたらわたしたちと一緒に冒険者やりませんか!」

メテオとともにウォルスタに戻ったあの日。冒険者としてやっていこうと心に決めたときから、

エステルは頭の中で、パーティメンバーになつてもらえそうな者を、リストアップしていた。その筆頭がリコッタ・セントクロアであった。

だからメルとともに、ウォルスタ領事館で働くリコッタにそう声をかけたのだ。メテオと『流れ星』で苦楽をともにしたリーズン・エルフィランド。その弟子であるリコッタを誘うのは、エステルにもメルにも異論があろうはずもない。

「……よく、事情が呑みこめないのですが」

冷静に切り返したリコッタは、お茶などを振る舞いながら、要領を得ないエステルと、言葉足らずのメルの話を抱強く聞き出し、ようやく合点がいった。

「わたしはリーズン様の弟子であり、領事館秘書みたいなものですので、即答はできません」

想像はしていたものの、即答をもらえずにがっかりしたふたりだったが、リコッタは意外にも乗り気であるようであった。

「なので今、リーズン様にお伺いを立ててきますね。少々お待ちください」

そういつて席を立ち、再び戻ってきたときには、いくぶん晴れやかな顔で吉報を告げた。

「リーズン様にはご快諾いただけました。これからよろしくお願いいたします」

どこか遠くで壁か何かを殴る音とともに『メテオの野郎!!』といった罵声がしたのだが、無事にパーティメンバーを加えることができたエステルとメルは耳には届かなかった。

「リコッタさんって、わたしが思っていたよりずっと落ち着きがあって、即断即決なんだな」と思

います」

エステルが、ぽつりと漏らす。

「そんなことありませんよ。わたしも、いずれはリーズン様のような精霊使いになりたいと思っていました。ですからエステルさんのお誘いを理解したとき、本当に嬉しかったです。だからあんな——」

リコッタは、リーズンと交わした話の内容を思い出して言葉を切った。念願の冒険者になりたいというチャンスに、つついりリーズンへ無茶で性急なお願いをしたことを自覚しているのだ。

「それはともかく、せっかく冒険者としてパーティを組んだわけですから、『さん』付けはやめませんか？ わたしのはリコッタと呼んでください。わたしもエステルと呼ばせていただくので」

「では、年上の女性だからと遠慮していただきますけど、改めてよろしくお願いします、リコッタ!!」

女性？ 思わずリコッタは不審な顔をしそうになった。エステルが自分のことをよく知らなかったことに虚を衝かれたのだ。てっきり、リーズンがそれとなく伝えているのだばかり思っていたが……おいおい事情は説明していこう。なにしろ、今はそれどころではないのだから——と、言葉を呑みこむ。

「竜巻が近いです。そろそろ馬を下りて魔法を使う態勢に移りましょう、エステル」

「ええ。それにしてもリコッタ。その……言葉遣いも、もっと砕けた感じでも構わないんだけど」

「言葉遣いはこれで普通なので、気にしないで。職業病みたいなものの……」

馬から下りてすまなさそうにするリコッタ。長くリーズンのもとで秘書のように領事館の接客などをしていたので、どうしてもしゃちほこばった受け答えになつてしまうのだ。実際、同年代の友達といえるのはエステルとメル、そしてもつとも身近な『あいづ』くらいだ——

なにせよ、余計なことを考えている場合ではない。竜巻はあと数分もせずに呪文の射程に入らう。今はもつと実務的な相談を交わすべきだ。

エステルも同じように考えたらしい。

「わかった。ところでリコッタは、リーズン様みたいな精霊は操れるの？」

分かれる前にリーズンが見せた炎の上位精霊、イーフリート。あれこそ、精霊魔法を窮めた者の証である《上位精霊支配》コントロール・エレメンタル・スリット。四大精霊の王ともいえる存在を自在に操ることができる究極の精霊魔法だ。

「力を借りるだけならともかく、上位精霊の支配はできない。下位精霊であれば水の精霊ウンディーネを従えているけれども、いつもは上下水道の水質浄化をやってもらっていて、今は連れていないの……」

リコッタはすまなさそうに呟いた。つぶや水の精霊ウンディーネは、その特殊能力で汚水を真水に変え、生水をおいしい飲料水に変えることができる。町の生命線を守る仕事で、以前はリーズンが受け持っていたのだが、《下位精霊支配》コントロール・エレメンタル・スリットを使えるようになってからは、リコッタがその仕事を受け継いでいた。

「でも大丈夫です。広範囲の攻撃魔法は習得していますから。竜巻に《大旋風》を当てて、勢いを削ぎ落とします」

「わたしは撃てるだけの《火球》を撃ちます。でも、魔法が重なると竜巻にダメージが通りにくいかもしれないので、わたしは下半分を狙います。リコッタは上空の広い範囲をお願いします」

「わかりました」

徐々に近づいてくる竜巻に気圧されまいと、ふたりは気を張る。魔法の射程に入ったら、あとはもう魔石に込められた魔力と、自前の精神力が尽きるまで撃ち続けるだけだ。

「大きいですね……止められる気がしないです」

リコッタは素直な感想を口にした。《大旋風》は、風の上位精霊の力を借りて発現させる上位の精霊魔法。初めて使ったときにはその威力に感動し、自分も精霊使いとしての高みを垣間見たと感じたものだ。

だが、目の前でのたうつ蛇のような竜巻に対し、自分が生み出せる風の力など微々たるもの思えた。

「大丈夫。ふたりいれば止められるよ」

エステルが、ハーフエルフの震える手を優しく握る。精霊使いとしてはレベルの高いリコッタだが、冒険者としての活動はなく、当然このような超常現象じみた事態に直面したことはなかった。

対してエステルは、メテオといっしょにクラウドドラゴンと戦い、『不死の王』という破格の存在も目にしている。本人は気がついていないのだが、自分よりも強大な相手と対峙した経験が、彼

女の観察眼に経験と落ち着きをもたらしているのだ。

現にリコッタは、エステルの根拠のない言葉と握られた手に、安堵を感じていた。理屈ではなく、絶対の自信と信念が伝わってきたからだ。

「不思議ですね。エステルがそういうと、易々と止められる気がします」

「易々とはいかないだろうけど、止められるよ」

「信じてます。……リーダー」

「えっ、今なにかいった？」

「いえ、先に魔法を当てますね。ジンよ、力をお貸しください……。《大旋風》!!」

風の上位精霊ジンの名を呼ぶと、複数の旋風が竜巻に向かって飛んでいく。竜巻の巨大さに比べて小型ではあるが、複数呼び出されたそれは、竜巻の周囲を取り囲むように動く。回転数の違う竜巻同士がぶつかりあい、取りこまれることで、急激に勢いが落ちた。

「すごい、竜巻の勢いが一瞬弱まった」

「数を撃てば止められるかもしれませんが、《大旋風》は今のわたしには魔力の消費が多くて……。魔石があったとしても、連続で撃てるのは十が限度です」

「任せて。《火球》はそこまで消費が大きくないから数を撃てる……。出でませい。天を焦がす炎と石壁崩す衝撃よ。爆ぜて散れ。《火球》!!」

五発の火球が、竜巻の真ん中から下までを爆破で包む。

「このぶんなら……止められるわ!!」

エステルは、懐ふところに入れている魔石が魔力を使い果たして崩れる感触に不安を覚えつつも、手持ちの魔石の量と自前で使える魔力の残量、そしてリコッタの強力な魔法があれば、決して不可能ではなさそうだと確信する。

(魔法で竜巻を叩たたき伏せる。そんなことができたなんて、考えたこともなかった)

リーズンは、わかっわかっわていてリコッタに任せたのだ。竜巻に魔法をぶつけて止めた経験でもあるのだろうか。少なくとも、それに近いことはしたことがあるのかもしれない。そう思わせるくらいに、あのときは迷いがなかった。

この大陸でもっとも強力で有名な冒険者パーティ——『流れ星』。

きつと、これよりもっと絶望的に手に負えない冒険をくぐり抜けてきたにちがいない。

(わたしたちも、いつか『流れ星』のようなパーティを……)

メテオ、アーティア、ガルダ、リーズン、ハム、そしてこの町ができ上がったころには姿を消していたがマリアージュ。わたしたちもいずれは彼ら、彼女らのようになりたい。

(今はまだわたしと、メルと、リコッタの三人だけど、お師匠様たちみたいに気のおけない仲間とこの世界を旅してみたい)

そのためには、こんなところでつまずくわけにはいかない。

エステルは、メテオからもらった魔法の発動体である腕輪に魔力を込め、『火球』の呪文を唱える。

(でも、リーズン様はこんな竜巻を四本も止めることができるのかな……)

炎の上位精霊イーフリートを従えているとはいえ、この竜巻は魔法の手数と威力がものをいう。

(やめよう。リーズン様のことだ。何か考えがあつてのことにちがいない。わたしはわたしのできることをする)

隣で精霊と交信しているリコッタと目が合った。

——どうやら、お互い考えていることは同じらしい。

一刻も早くこの竜巻を止め、できることならリーズンのところに加勢に向かおう。

そう心に決めて、ふたりは竜巻に魔法を叩たたきつけるのだった。

5 炎使い

「楽しいなイーフリートよ。炎の魔法は楽しいな!!」

火の上位精霊、全身に炎を纏まとったイーフリートの肩に乗り、リーズンはすこぶる上機嫌に吠えた。イーフリートの全身からゆめく炎が、リーズンを焼くことはない。

イーフリートは五メートルはあろうかという巨人で、上半身は鬼のような顔を持った裸体。下半身は炎に包まれ、足が見えない。空を浮くように移動しており、足は必要ないのである。

「はははは。これほど炎の魔法を好き放題扱えるなんて『ジャハムの凍こてつく迷宮』以来だ。柄がら



にもない領主の仕事で溜め込んだ鬱憤^{うっぷん}をすべて吐き出してくれる!!」

心底楽しそうなウォルスタ領主の声を聞きながら、すこし下がってその姿を見守るのは三人。完全武装の戦士、ハム。普段と同じ服装のガルーダ。そして猫族の戦士、メルだ。

いつもと変わらぬ様子でリーズンを眺めるハムやガルーダとは裏腹に、メルは目を白黒させて狂喜乱舞するウォルスタの領主を仰ぎ見た。

なにしろ、炎の巨人の肩に乗って強力無比な炎の嵐を連発しては哄笑^{こうしょう}を上げている。どこからどう見ても、ひとつの町の領主ではない。

いや、それどころか冒険者にすら見えず、ましてや森と自然を愛するエルフにはとうてい見ええない。最大限に好意的な目で見たとして、長い間封印されていて身動きできなかった邪悪な魔法使いが、自由になって暴れまわっている――

そんなふうにはしか見受けられなかった。

「――そうれ《炎の嵐》^{フレイズストーム}。はははははは、この熱波と炎の眩しさ^{まぶさ}。こうだ、魔法とはこうでなくてはな!!」

リーズンとイーフリートが繰り出す炎の嵐が、またたくまに竜巻のひとつを吹き飛ばした。

「イーフリート。次は右手の竜巻だ――行くぞ!!」

「承知」

左翼と右翼の竜巻がまだ残っているというのに、イーフリートを伴ったリーズンは鬼神のごとき破壊の魔法で誰よりも早く竜巻を消し去る。エルフラしからぬその姿を見たメルは、呆気^{あっけ}にとられ

てガルーダとハムに問いかける。

「り、リーズン様すごい……!! でも、エルフって普通は、炎の精霊とかあまり使わないイメージがあったニャ。炎の精霊とめっちゃフレンドリーに話しているニャ」

興奮して語尾にニャをつけたメルが、素直な感想を漏らす。本人は直そうとしているのだが、興奮したりすると、猫族の方言が飛び出すのだ。

「おいらの知っているエルフも、普通は炎の精霊とか使いたがらないよう。普通は」

「リーズンを普通のエルフというのは無理がある」

ガルーダとハムは極めて冷静だった。どうやら彼らにとって、この光景はそれほど驚くようなものではないらしい。

「リーズン様は普通のエルフじゃないのニャ。もしかして、闇エルフ……？」

「しっ、リーズンに聞かれたらミンチにされちゃうよう」

「ミ、ミンチ!？」

「ミンチはいすぎだ。……が、以前リーズンを闇エルフ呼ばわりした冒険者は、それに近い状態になっていたな」

——闇エルフ。

エルフが森と水と風を愛する種族であるなら、闇エルフは炎と闇と心を操ることを好む種族。闇エルフは邪神崇拜をしている。正統派エルフをそんなふうに呼べば、それは蔑称にしか聞こえない。

「リーズンが炎の魔法を使うのにはこだわりがあるらしい。闇エルフ扱いすると、たまに本気で怒

るから気をつける」

「メテオはよくその言葉を使ってケンカしていたよう」

「あいつらのケンカは仲のいい証拠だからな」

遠くからリーズンの楽しそうな哄笑こっしょうが聞こえてくる。

「リーズン様はどうして炎の精霊が好きなのー？」

「スカツとするからじゃない？」

「楽しいからじゃないか？」

身も蓋もない即答に、メルはなるほどニャ、と頷くことしかできなかった。

なににせよ、そんな子供じみた理由もむべなるかなと思わせる喜悅きえつが、今のリーズンからは感じられる。

「メル、お喋りしゃべはそこまでしておけ。リーズンが竜巻を片付けたら……いや、片付ける前にも俺たちの出番が来るかもしれない。猫族の鋭い目でよく戦況を見ておけ」

ハムは喋りしゃべながらも視線を竜巻の向こう側に向けている。この竜巻をもたらした者が先にいると確信している目だ。

「今は魔法使いのターンだが、最後にあいつらを守るのは俺たちだ。いつでも動けるようにしておくんだ」

「はいニャ!!」

メルは瞳孔どうこうを開いて、リーズンの戦う姿を観察する。

そして、やっぱり悪の魔法使いにしか見えないニヤ、と呟くのだった。

この日のリーズンは絶好調だった。

冒険者のころは、『炎の精霊を好むエルフ』という評判でいつも白眼視されてきた。喧嘩っ早く、なにかという炎の精霊をけしかける。リーズンが通った後は焦土となる——そんな悪評があまりに広まり、冒険者稼業にも支障をきたすようになったこともあった。

——自分のせいで『流れ星』の評判が落ちている。

そう思ったリーズンは、一度パーティから離れようと思ったことさえあった。

だが、その悩みも馬鹿らしくなるほど、『流れ星』の面々はわだかまりなく接し、リーズンが侮辱されることがあれば、全員で牙を剥いて威嚇するがごとくだった。おかげで『流れ星』の名前は一時期評判を落としたものだ。

なんのことはない。心にわだかまりを持っているのは自分の方だった。

そう考えられるようになった途端、それまで扱うことを嫌っていた水の精霊や風の精霊も、自在に操れるようになった。もちろん、好んで使ってきた炎の精霊も、今まで以上によく使えるようになった。仲間と心が通じるようになって、精霊たちとも通じ合えるようになったというわけだ。

それからというもの、好きだった炎の精霊の出番は少しだけ減った。

誰かに遠慮したということではなく、単にその場に適した精霊を呼び出し、力を借りたほうがいいことに気がついただけだ。妥当であると思ったシチュエーションでは、力いっぱい炎の精霊と戯

れるのだ。

『ジャハムの凍てつく迷宮』というのは、まだウォルスタを作る以前に挑んだ迷宮の名だ。

その名の通り、迷宮は極度の低温が支配する場所だ、この場で有効だったのはリーズンの操る炎の精霊だった。凍える場所ではあったが、誰はばかるとなく炎の精霊——その頃はイーフリートではなく、下位のサラマンダーであったが——を実体化させて、休憩中に暖を取り、立ちふさがる氷壁を溶かし、向かってくる敵に火の礫を浴びせた。

ちなみに他のメンバーは、『ジャハムの凍てつく迷宮』についていい思い出がない。馬鹿みたいに深く入り組んだ迷宮で、攻略に一週間を要した。吐息すら凍りつく極寒の迷宮での野営は、精神的にも肉体的にもきつい。ガルードなど、途中で帰ろうと力説したくらいだ。

だが、『ジャハムの凍てつく迷宮』で得たものは大きかった。

今もリーズンが操る炎の上位精霊、イーフリート。

『ジャハムの凍てつく迷宮』は、このイーフリートを封印するための迷宮だったのだ。

「——炎はいい。生き物が暮らす上で必要な光と熱を与えてくれ、文化的な生活に必要な料理にも使われる。森が火事で燃えたとして、その灰から以前よりも木々が繁茂する」

誰かに「なぜエルフなのに炎の精霊を好むのか？」と聞かれたとき、悪意がない問いかけに限ったことではあるが、リーズンは嬉しそうに熱弁を振るう。

「自然との調和を愛するエルフであるからこそ、だ。炎は破壊の象徴であり、生命の象徴でもある。

そしてそのふたつは切り離して考えることができないものだ。俺にいわせれば、破壊をもたらすからといって短略的に炎を遠ざけるエルフのほうがおかしい。もっとエルフは炎を知るべきだ」
なお、このように理路整然と語れるようになったのがごく最近であるのは、あまり知られていない。

「イーフリートよ。同時に竜巻全体を炎で包むぞ!!」

「任せれよ」

刹那。

巨大な竜巻が巨大な火柱と化す。

魔法のとばつちりを食わないよう十分距離を取っていたハムたちにも、肌を焼くような熱波が届くほどの威力であった。

「これで二本目。両翼の竜巻も消滅している。頑張ってくれたようだな」^{がんば}

派手に爆炎を上げるリーズンとイーフリートに気を取られていたが、見ればロルトじいとエステルたちが受け持った竜巻が消滅していた。

これで残る竜巻は二本。

「さて、名残惜しいが竜巻もあとふたつ。アーティアが奮発してくれた魔石も、半分残して余裕だな。ストームプリンガーよ。お前の大層な竜巻よりも、俺やイーフリートの炎の嵐のほうがよほど強力だということを見せてくれる!!」

高笑いを上げて、炎の巨人とエルフは、竜巻へと突撃した。

その様子を見て、パーティメンバーは目を細め、メルは目を丸くするのだった。

6 イーフリートの思い出

下半身に燃え盛る炎をまとい、巨人族並みの大きさを誇り、鬼^{オウガ}のような恐ろしい顔をした炎の上位精霊、イーフリート。彼は自分の肩に乗り、上機嫌で自分と同じくらい強力な炎の魔法を操るエルフの男をまじまじと眺めた。

（奇妙な男よ。エルフだというのに我を嫌悪せず、それどころか我と同じくらい炎を好んでいる）
炎の精霊といっても、イーフリートは魔神と呼ばれる存在に近い。

下位精霊と違い、確固たる意思を持ち、平素はこの世と違う次元にある世界で暮らしている。訳あってはるか昔、人間の魔術師におくれを取り、どこぞの迷宮に封じられていたのだが、本来であれば、人間の魔術師に封印されるなんてミスは犯さない。

無様に封印をされたのは、イーフリートの運が悪く、相手の魔術師の運がよかった結果といつていい。

人間ごとにおくれを取ったことで、イーフリートはかなりご機嫌が斜めだった。

そして、今度は人間たちに封印を解かれてしまった。人間どもの身勝手さに思わず自身を解放した相手に襲いかかったくらいだ。

しかし、惨敗した。

ほんの六人だったが、ひとりも殺すことができず、逆に封印されて弱っていた力を、根こそぎ使い果たしてしまった。

ふたたび指輪に封印されてしまったときには、さすがに焦った。

また、何年何十年何百年と封印され続けてしまうのかと。

寿命の概念がなく、次元の異なる『アヤタレウ』という地においては死すらない。だから、こうして封印されて退屈な時を過ごすことが、もつともこたえる。

悔恨の念の中、指輪に魔力が注ぎ込まれるのを感じた。

(イーフリート。俺と友達にならないか?)

相手から、精霊である自分と会話をするための念話が送られた。戦っているときには気にもしていなかったが、エルフの男の声だった。

(……………)

(俺が一番好きな精霊。炎の精霊の上位種。仕えろとはいわない。友でいてくれればいい)

(……………)

このエルフはなにを考えているんだ?

(反応なし、か。まあいい、今から自由にしてやる。その後は自分のいた世界でもどこでも、好きに帰るがいい)

エルフから供給される魔力は、イーフリートがふたたび現世に出ることを可能にする。

イーフリートは、そのとき初めてエルフの精霊使いの顔を見た。

まごうことなくきエルフを示す長耳。伶俐で傲岸そうな表情で、イーフリートの巨軀を見上げていた。

(友になれないのは残念だが、お前を封じておくつもりはない。こんな寒い迷宮に閉じこめられて気分が悪かっただろう。自分の世界に戻るといい)

(……礼はいわぬぞ)

(礼くらいはあつてもいいと思うがな。まあいい、いずれは自力で呼び出してみせる。それまで、もう人間に捕まるなよ)

憎まれ口を叩くエルフ。その調子は、悪意を感じるものではなかった。

何かが気になったイーフリートは、自分の次元に帰ったふりをして、迷宮から戻る彼らの様子を見守っていた。そして、自分との戦いでボロボロであった一行が窮地に立たされたとき、思わず《炎の風》で加勢をしてみた。

それからこのエルフと冒険者たちとは、長い付き合いとなった。

「……リート。イーフリート? どうした、聞こえているか」

「ああ、少し余計なことを考えていたようだ」

まさか炎の魔神が自分と出会った頃を追憶していたとは思わず、リーズンは心配そうにイーフリートの首筋を叩く。

「疲れたのか？ 竜巻はあと二本。大丈夫そうか」
 「問題ない。早いところあのつむじ風を散らして、その奥に隠れているであろう敵を黒焼きにしてくれよう」

「……それは難しいかもしれない」

「なぜだ？ このままいけば竜巻は容易^{たやす}かろう。剣士のひとりやふたりなど物の数でもない」

「時間が無い。手短に話すが、魔法の効かない相手が出てくるかもしれないんだ。そら、三本目を消すぞ!!」

リーズンは『炎の嵐^{ファイアストーム}』を竜巻に撃ちこむ。イーフリートもそれに倣^{なら}い、同じく魔法を竜巻に叩^{たた}きこんだ。高い魔力を秘めたふたつの魔法は、この一度きりでも竜巻の勢いを相当弱めている。

「炎の精霊魔法の扱いにこれほどまで長けたお主がいうのであれば、そのような存在もいるかもしれない。なに、魔法が効かなくとも、このイーフリート、一流の剣士であろうとおくれを取ることはない。お主の仲間が駆けつけるまで、前衛は任せるがいい」

「頼もしいな」

「せいぜい、お主が懐^{ふところ}に吞^のんでいる小箱を使わせぬようにせねばな」

イーフリートの言葉に、エルフの長耳がピクリとする。

「イーフリート。お前はこれ『寄木^{よきぎ}の箱』の中身を知っているのか？」

——『寄木の箱』。リーズンもイーフリートも知る由^{よし}もないが、あちらの世界においては『破水の箱』と呼ばれるアイテム。その意味は、リーズンの女性プレイヤーがこの小箱を手に入れたセツ

シヨンの最後に、レベルアップとともに破水をしたことに由来する——

それはともかく、この『小箱』は手に入れたときからあらゆる『鑑定^{アナライズ}』の魔法も通用せず、効果がよくわからないまま、リーズンが預かっているものだ。

メテオにいわせると「鑑定の魔法が一切通用しない……いや、俺の魔力が足りないとかこの小箱に魔法の阻害^{そがい}がかかっているとかじゃなくて、魔法が一切かららないんだ。なにもない空間に対して魔法を使っている感覚で、とにかく俺には鑑定しようがない」とのこと。

『鑑定^{アナライズ}』が一切通用しない。

そんな奇妙な箱に、なにが封じられているのか。

というわけで、入手以来、この小箱は『流れ星^{シューティングスター}』の切り札としてリーズンが保管することとなり、幸い今まで使われたことはなかった。

ただし、精霊が封じられていそうだと、いうことはわかっている。

精霊使いであるリーズンには、ごくわずかだが、精霊の力の痕跡^{てんせき}のようなものが感じられる。それは、リーズンが今まで感じたことがない、不思議な精霊力だった。

しかも発見した場所が、ありとあらゆる属性の狂った精霊たちがひしめく洞窟^{どうくつ}の最深部。できれば使いたくないというのが、ガルルダを除いたパーティの見解だった。

「ああ、中に封じられているものについては、お主たちより知っている」

イーフリートはなぜか気乗りしないふうだ。リーズンもまた、炎の魔神たるイーフリートがこんな表情を見せたのは初めてなので、気をそそられた。

「ずばり、中にはなにが封じられているんだ？」

「それは言えぬ。精霊同士の約束事のようなもので、我はそのことについて詳細を口にできぬ」

それを聞いてリーズンは確信した。中にいる精霊はとんでもなく古い太古の精霊。世界創造にもかかわるクラスの精霊だ。

精霊の約束事というのは、同格かそれ以上の存在についてのみ適用される。下位の精霊が上位の精霊について多くを言及することはできないが、その逆はできる。

イーフリートは、この世界で知られている限り、もっとも上位の炎の精霊種。そのイーフリートの言葉を縛る存在となれば、あとは伝説に語られ存在すら怪しまれる星の精霊くらいだろうか。

世の中には未だ知られていない精霊が存在する。この小箱にはそういったものが入っているのだろう。

「いや、それで十分。胡乱なアイテムなので、できれば使わずにいたいとは思っていたのだが、これで開けがいが出てきたというものだ」

「……うむ」

何かいいかげんなイーフリートは、そのもやもやした感情を吹き飛ばすかのような炎の嵐を竜巻にぶつける。

それを見たリーズンも、拡大した魔法を竜巻へと叩きこんだ。太ぶりの魔石がまたひとつ粉々に崩れ去ると同時に、五本目の竜巻も消滅する。

残った竜巻はあと一本。

リーズンとイーフリートは、標的にしていた竜巻が完全に消滅したのを確認すると、言葉を交わさずに最後の竜巻へと向かう。

この以心伝心といった様子はまるで、長年連れ添った冒険者のようだった。

7 ストームブリンガー

「残りの魔石はあとひとつ。イーフリートが手伝ってくれなければ、さすがに厳しかった」

魔法の絶対失敗を警戒し、大きな拡大をせず、リーズンは後退しながらイーフリートとともに、炎の嵐をちびちびと竜巻に撃ちこんでいく。竜巻を囲むように一度に魔法を拡大展開したほうが効率的ではある。だが、竜巻と町の距離がまだ開いていることと、魔石が尽きたとしてもイーフリートがいれば竜巻のひとつくらいはどうとでもなるという考えなのだ。

「厳しいとはまたずいぶん控えめな表現。我がいなければ、この町を守り切ることなどできなかったろうに」

リーズンの呟きを聞き逃さず、己の武功をアピールする炎の精霊イーフリート。炎の精霊を好む変わり者のエルフにふさわしく、この炎の精霊もまた、精霊には珍しく人間の軽口に付き合うだけの諧謔を知っているらしい。

嘘をつくということを知らない精霊において、こうした人間味を出せるものは極めて稀だ。精霊

もまた長く人間と接していると、影響を受けるのだろう。

「俺の精神力が万全だったら、お前の力を借りるまでもなかったんだがな。あの忌々しいペスト野郎のせいで、ギリギリの戦いになってしまった」

「……メテオといったか。ひとりで向かったあの魔術師は息災であろうか」

「腐っても『流れ星』のリーダーだ。俺にイーフリートや『小箱』の切り札があるように、あいつも何かしら切り札を持っている。それに、あいつはどうやったか知らないが、えらく強力な力を得た。心配ない」

断言するリーズン。対してイーフリートはやや懐疑的であった。

「そうなのか？ 我が見るに、この竜巻を生み出す者と同格の者が相手であれば、苦戦は免れないと思わざるを得ない。後ろに控えている戦える者を回したほうがよかったのではないか？」

「あるいはそうかもしれないな」

リーズンは『炎の嵐』を小出しにしながら、イーフリートの問いかけを否定しない。

「最善であつたかどうかはすぐにわかる」

「お主らしいな……我も最善を尽くすでしょう」

イーフリートも、これ以上の詮索は無用とばかりに炎の嵐を竜巻に撃ちこむ。ランダムに暴れ狂う炎の乱舞が、竜巻の勢いを劇的に弱めた。

「あと一撃二撃といったところか。とどめを頼めるか、イーフリート？」

「任せておけ」

鬼の相貌を持つイーフリートが、牙を剥いてにやりと笑った。

「此度の戦いはまこと爽快であつた。お主が領主となつてからは久しく出番がなかったゆえ、ストームプリンガーとやらの感謝したいほどだ」

「ああ、俺もだ。ストームプリンガーに感謝はできないがな」

「そら、これで最後」

イーフリートが竜巻に向けて手を突き上げ、猛火の渦がほとばしった瞬間――

竜巻も炎も、すべて元からなかったかのように消え失せた。

しかし、同時にイーフリートに異変が起きた。

「ガアアアアアアアア!! なんだ、この空間は!？」

「どうしたイーフリート!？」

「すまぬが、このままでは現世に実体化し続けられぬ。一度指輪に戻る――」

「イーフリート？ どうした、なにがあつた!? イーフリート!!」

「バラムシクの魔封じの力だよ、精霊使い」

リーズンの背後から男の声がした。

「……貴様は」

「ああ、俺は『ストームプリンガー』。訳あつてウォルスタとその住民の生命を貰い受ける」

魔法の道具で姿を消していたのだろうか。抜き身の剣を手に、軽装の鎧だけをつけた男が突如現れた。

竜巻に気を取られていて「ストームプリンガー」を名乗る男の接近に気が付かなかった。すでに相手の剣の間にいられてしまっている。

だが、リーズンは臆することなく今までの疑問をぶつける。

「なぜ、ウォルスタの町を襲う。定められた税を納め、ユルセル王の無茶な要求にもこれまで従ってきた。虐殺といつていいこれまでの行為、ぜひ申し開きをしてもらおうか」

「そういうのは王に聞いてくれ。——それにしても、予定よりずいぶん元氣な奴が多いな。ペストプリンガーが先駆けして、数を減らしてくれているはずなんだが……ちよっと前に町が光り輝いたことと関係あるのか？」

「やはりあのペストも、貴様らの仕業か。ますます理解できない。なぜそこまでしてウォルスタを、我々をつけ狙う!？」

「だから、そういうのは王に聞け。もつとも誰ひとり生き残らせるつもりはないが……。おい、いないのはお前らのリーダーの魔術師だけか？　ひとりであの骸骨のバケモノのところに向かったのか。もつと戦力を分散してくれると思ったんだが、魔術師ひとりでペストプリンガーを相手取るつもりとはいいい度胸だな」

少しだけ意外だという顔をしたストームプリンガーは、すぐに嬉しそうにくつくくと笑い出す。「が、おかげで『流れ星』の戦士と戦うことができそうだ」

「なにをふざけたことを!!　ワルキューレよ!!」

リーズンが「男性」を守護する精霊——ワルキューレを召喚しようとする。しかし、それは不発

に終わった。

「無駄だ。バルムンクは、すべての魔法を封じる」

無造作に間合いを詰めるストームプリンガー。その手には一振りの剣——魔剣バルムンクがある。嵐をもたらす者の由来となった強大なアーティファクトだった。

(これはやばい。上位精霊すら強制送還させるほどの魔封じか)

最悪の状況だ。魔法を封じられ、イーフリートすら指輪に強制送還されてしまった。魔封じの効果は、マジックアイテム自体を解呪するものではないが、マジックアイテムが外界にもたらす効果は封じられてしまうようだ。

この魔封じの効果範囲がどれくらいあるかはわからないものの、その範囲から抜ければ魔法は使える、イーフリートも再召喚できるだろう。

だが、目の前の剣士から逃げおこせられるのか。

事態を見守っているハムたちは、こちらに向かっているはずだ。ただ、どんなに急いだところで十数秒はかかってしまうにちがいない。

それまでリーズンは、身一つで自分を守らなくてはならない。

「お前がウォルスタの領主。『流れ星』の炎使い。リーズン・エル・フィランドか。さすがに俺の竜巻を六本も打ち消されるとは思っていなかったぞ」

リーズンは答えず、腰を落としてストームプリンガーの動きを観察している。前衛で戦う術を持ち合わせていなくとも、動き出す一瞬を逃さなければ奇跡は起こりえるはずだ、と。

「俺は『ストームブリンガー』の名の他に、『魔術師殺し』と呼ばれているが、魔法使いに興味はない。さつさと『流れ星』の戦士、この大陸で最強と呼ばれる『鉄壁のハム』とやらと戦いたいだけだ」

ずいとい歩を進めるストームブリンガー。それに合わせてリーズンも同じだけ下がる。

「逃げられると思うか？ 後ろからお仲間が走ってきているが、それまでに始末させてもらう——」

ストームブリンガーの剣が疾走する。

抜き身のままだらりと下げた剣が、何の予備動作もなくリーズンを袈裟がけにしようと閃いた。

「リーズン!!」

後方から駆け寄るハムには、剣の軌道がはつきりと見て取れた。

おそらく、自分と同格かそれ以上の実力を持つ者の剣筋だ。

そして、その剣が仲間のエルフには避けることができないであろうことも見て取れた。

剣が必殺の威力を持っていることを理解し、ハムは仲間の名を叫ぶ。

避けることはおろか反応すらできず、リーズンは左の肩口から深々と魔剣に斬り裂かれた。

「……………!!!」

おびただしい血潮が細身の身体から噴出する。

リーズンは糸が切れた人形のようにぷつりと膝が折れ、自分が作った血の海に崩れ落ちた。

8 長い一瞬

(……まだ死んでいないか)

ストームブリンガーの斬撃を左肩口から受けたリーズンは、全身の力が抜けていくのを感じながらも意識を保っていた。

それは自分でも驚くほどで、これが死の間際に起こるといわれている、現世と別れを告げるための圧縮された時間というやつか、と思った。

伝説にのみ伝えられた、時の精霊が導くといわれる生と死の間にある、無限の時間——

(……左腕はもう動かないな。かろうじて右腕を動かせるかどうか。いずれにせよ、失血で放っておけば死ぬ。ストームブリンガーも、俺が生きているのを知れば止めを刺すだろう)

ストームブリンガーの剣筋すら見ることができなかった。剣の力もあるのだろうが、彼の剣士としての腕も相当なものだ。いつも目にしてきたからわかるが、ハム以外では互角に渡り合うことも難しいだろう。

(まさか、イーフリートまで封じるとは……実力を見誤っていたな。こんなことなら、火傷を負う覚悟を決めてもらってハムについてもらうべきだったか)

イーフリートの炎は、支配権のある精霊使いの身を損なうことはないが、その他の人間にとって危険極まる灼熱の火柱みたいなものだ。側にいるだけで、ハムといえどもダメージを免れないほどの熱量を帯びる。

朦朧もうろうとしていながら明晰めいせいなリーズンの意識が、自分を呼ぶ声をとらえた。

(……ハムか。すまない、守られてやれなくて。『流れ星』の守護神の顔に泥を塗ってしまう形になるな)

ハムの本気装備のひとつに、ドゥンフォルトという盾たてがある。これは、近くの仲間が負ったダメージを、一定の量までハムが肩代わりしてくれる効果がある。『流れ星』の面々がこの盾たての魔力に救われたことは数えきれない。

だが、今回はその力が発動することはなかった。

(ドゥンフォルトの魔力効果も封じるほど、徹底した魔封じの能力……。メテオ、こいつの剣は危険だ)

『流れ星』のリーダーにして、大陸最強の魔術師、若返った子供メテオの姿が、リーズンの頭をよぎる。

(確かメテオも封魔の呪文——《反魔力領域》アンチマジックだったか？ 使えるようになったんだよな……。魔法使いならともかく、剣士が最高位の魔術師呪文を、アーティファクトとはいえ扱えるのは反則だろう)

——メテオ。

——ハム。

——アーティア。

——ガルード。

——マリアージュ。

十年という、エルフにとつて短いはずの時間が、とてつもなく長い時間であった気がする。冒険の中で苦楽をともにした仲間たちとの時間。

移動中の馬車で、メテオが子供向けの冒険小説を真剣に読んでいたこと。

砂漠で遭難しかけながら見つけた町で、ハムがうれしそうに異国の剣を買いこんだこと。

依頼を持ちかけた商人と一時間以上交渉して、報酬ほうごを三倍にさせていたアーティアのこと。

ガルードが誤作動させた罠わなで生命を落としかけたときのこと。

猫屋敷の三倍盛りミートソースパスタを食べるマリアージュ。

どうでもいいことから大変だったときのことまで、記憶が次々とリーズンの頭をよぎった。

(——走馬灯そうまどう。時の精霊ときえんが生と死の狭間の時間に見せるといわれる光景。……これがそうなのか) 自分は死ぬのだろう。

あれだけの出血と怪我けが。回復魔法すら発動を許さないであろうアーティファクトの力。そして、近くにストームプリンガー。

どこからどう見ても絶体絶命。助かる見込みはない。

(まさか、長寿を誇るエルフの自分が『流れ星』で真っ先に死ぬとはな)

薄れゆく意識の中で、リーズンはその諧謔かいぎョクに笑みをこぼした。

(…最後に悪あがきくらいいしなくては、メテオたちに顔向けできないな)

もう少しだけ、足掻いてみよう。

腰袋に手を伸ばして、『寄木の箱』を取り出し、箱を開ける。

ただそれだけのこと。

リーズンの眼前には『流れ星』の仲間がいた。

全員が自分を励まし、応援してくれている。

(——大丈夫、これくらいうまくやってみせる)

リーズンは、走馬灯の仲間たちに向かって微笑み返した。

この一連の混乱の中、イーフリートが消滅したと同時に仲間のもとに駆け出し、『ダウンフォール』の魔力を解放したハムの判断と動きは超一流のものであった。

だが、ストームブリンガーの魔封じの力と、仲間を斬りつける速さにはどうしようもなかった。

ストームブリンガーの魔封じは、すでに召喚されている魔物には適用されない。また、魔法のアイテムが恒常的に発する能力——攻撃の威力が増したり、身体能力が上がるものについても影響がないことは、メテオから知らされていた。

イーフリートも精霊ながら、最初から召喚していれば魔封じの影響は受けないだろう、と高をくくっていた。イーフリートは、炎の魔法を封じられたしても、巨体と膂力^{りよりよく}で並の戦士以上の戦闘力を有している。

ゆえに安心していい。

いや、油断とっていいだろう。

その結果が、血だまりに倒れるリーズンだった。

ハムも傑出した戦士。遠くからでも、あの何気ない一撃がただごとではないことくらいわかる。

——また、リーズンのあの傷が致命傷となっていることも。

「リーズン!!」

ハムの叫びに応じるはずもなく、リーズンはびくりとも動かない。

ハムは頭の中で、数限りないシミュレーションを繰り返す。

最高速度でストームブリンガーに接敵し、リーズンを救う方法を。

手に持つ長剣はクラウド・バーデイン。自らに訪れる危険を察知する能力を持つ魔法の剣であるが、この場合では何の役にも立たない。

ゆえに、間合いに入ればこの剣を投擲^{とうてき}して、ストームブリンガーの気を逸^そらす。そこらの剣士や怪物なら、この投剣だけで絶命させる自信があるが、超一流の剣士であろう相手にはせいぜい気を逸^そらすのが関の山だろう。

ほんの一瞬。息を吸って吐くだけの隙^{すき}ができるのならば、必ずリーズンの前に立ち、ストームブリンガーと相対できる。

ハムの希望はここだけであった。

投剣という奇策が通じなければおしまい。リーズンの前に立てたとしても、魔法による回復がな

ければおしまい。ストームプリンガーを倒すのに時間をかければおしまい。

——そして、自分が倒されればおしまい。

仲間を救うためには、針先ほどの可能性を信じるしかない。

しかしハムは絶望しない。

今まで幾度となく乗り越えてきた修羅場の数々が、奇跡を信じることに、信じて動かねば奇跡を掴めないことを知っているからだ。

「リーズン、頑張れ!! 諦めるな!!」

ふたたびハムは叫ぶ。

リーズンの右手が動いた気がした。

それに気がついたのか、ストームプリンガーの身体もわずかに動く。

(ここだ!!)

ハムは全身全霊を込めて、長剣をストームプリンガーに向けて投擲した。

9 救援

「なんだこれ……」

ペストプリンガーを倒した俺は、町の様子を確認したいのだが、あらゆる通信の呪文も転移の呪

文も探知の呪文も、ウォルスタを捉えることができなかった。

ウォルスタの端から端まで《転移》の座標に入れてみたものの、呪文が効果を発揮しない。いちばん生き残る確率が高そうなガルーダに《精神感應》を送ろうとしても、自室のアイテムに《探査》を使ってもダメだ。

考えられることは、ウォルスタの町を覆い尽くすくらいの《反魔力領域》が展開されている、ということだ。

おいおい、さすがにそのレベルの効果範囲はあり得ないだろう。

俺だつてそんな大きな《反魔力領域》を展開することはできない。

「仕方ない。ウォルスタからちょっと離れたところに出るか。——峻巖の山河、羽すら休められぬ空海、時を知らせる砂の重さ。我が翼はいずれも妨げとならず、目を閉じて開ければもうそこに。

《転移》……あれ？」

ここまで離れた場所でもダメなのか!?

もしかして俺、ストームプリンガーの力量を見誤ってたか?

いやな汗が背中を流れた。

10レベル魔術師であることがわかっていたペストプリンガーを放置するわけにはいかなかった。

そして、好きに《転移》でゲリラ活動をされることを懸念して、俺がこつちに来て速攻で倒したが、ストームプリンガーのほうが格上なのか?

「シャレにならないぞ」